

## 第9回

監修・執筆 六反田豊

# 古代・中世の朝鮮半島

### 今回学ぶこと

古代インドで成立した仏教は、その後、中国へ伝わり、さらにそこから朝鮮半島へと伝えられた。古代朝鮮の国々は仏教を厚く保護し、特に新羅では支配者の間で護国仏教の考え方が広まった。この考え方を受け継いだ高麗では、外敵の侵入を撃退するために国を挙げて『大蔵経』の版本作成が行われた。その一方で仏教の教えはしだいに庶民の間にも浸透していった。今回は、古代・中世の朝鮮半島の歴史を仏教に焦点を当てながら学ぶ。

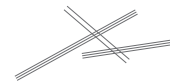
### 調べておこう・覚えておこう

- 古代インドで成立した仏教が各地に伝わっていく過程を調べてみよう。中国での仏教の普及において鳩摩羅什や玄奘三蔵などが果たした役割を調べてみよう。
- 護国仏教の思想とはどのようなものか考えてみよう。
- 支配者と庶民それぞれに対して仏教が果たした役割を考えてみよう。

### 朝鮮三国への仏教伝来

朝鮮半島の古代国家のうち、高句麗・百濟へ仏教が伝来したのは4世紀末のことである。両国ともにそれぞれ当時冊封関係にあった中国の王朝からおもに伝えられた。すなわち高句麗へは華北の前秦から、百濟へは江南の東晋から伝えられた。ただしこれ以外にも、高句麗へは一部江南から流入したのもあったといわれており、また百濟へはインド仏教も直接流入していたようである。

6世紀に日本へ公式に仏教を伝えたのは百濟であり、多数の百濟僧が日本を訪れ、古代日本の仏教文化形成に多大な影響を与えた。新羅への仏教伝来については諸説あるが、新羅の政府が仏教を公認したのは527年である。



### 新羅の仏教文化とその特徴

新羅では仏教公認以後、この宗教が本格的に社会へと浸透しはじめ、都の慶州周辺には皇竜寺をはじめ大規模な寺院が多数建立された。慈蔵・慧超・義湘・円測など多くの僧侶が唐へ留学し、帰国すると朝廷や支配階層の間に学んできた教をを広めた。

高句麗・百済との対立が深まるなか、新羅の支配階層は護国仏教の考え方を強く推し進めた。護国仏教とは、新羅は仏に守られた特別な国であり、仏教を信仰すれば国を護ることができるという考えである。こうした考えのもと、当時の僧侶のなかには、敵を撃退するためには殺生も容認されると主張する者もいた。また、義湘とともに唐留学を目指したが途中で断念した元暁は、国内にとどまって仏教研究を深めるとともに、歌や踊りを通じて庶民の間に仏教を広めることに力を尽くした。こうして仏教は次第に庶民の間にも浸透していった。新羅の仏教は6世紀末に日本へも伝えられた。

### 高麗の仏教文化と大蔵経

10世紀初めに新羅にかわって朝鮮半島を支配するようになった高麗でも、仏教は護国の思想として国家の手厚い保護を受け、多数の寺院が建立され、国家的な仏教行事がさかんに催された。王族や貴族の子弟で出家する者も多く、彼らの中から多くの高僧が現れた。高麗時代の仏教文化を語るうえで忘れてはならないのが、『大蔵経』の版木作成事業である。

『大蔵経』とは仏教の経典や解説書を集大成したものである。初め、契丹の侵攻を仏の力により退けようとして11世紀に作られたが、それが1232年にモンゴル軍の侵略で焼失したため、1236年、モンゴル軍撃退を祈願して再度の彫版事業に着手し、戦争中の困難な条件のもと15年あまりをかけて約8万枚、文字にして約5万2千字分に相当する大量の版木を完成させた。この版木は現在も韓国の海印寺に保存されている。